

髪が つなぐ物語 ～ヘアドネーション～

泉南市立西信達小学校 六年 中井 康裕

僕の妹は小学三年生。生まれてから八年ずつとのばしていた腰まである髪をハッサリ切った。「ヘアドネーション」をしたらしい。それがこの本との出会いだった。

白血病や小児ガンなどの治りようで髪が抜けたり、無毛症で生まれつき髪や眉毛がない子や髪が抜ける脱毛症で悩んでいる人が、いるそうさ。そのことでいじめられたり、からかわれたり、不安を抱えている子がいるそうさ。僕は三年の頃に友達に悪口みたいなことを言われたことがある。人は見た目で判断してしまうことがある。

ヘアドネーションは、長くのばした髪を寄付して医りょう用ウィッグを作つて髪を無くした子供たちに届けてあげるのだ。日本で最初にはじめたのが大阪府のサロン、ジャーダックだ。ジャーダックには全国の賛同サロンから提供してくれた髪が届いてそれを海外の専門業者に送つてトリートメントして、日本人の髪の色にそめて、一本二本手作業でまとめてウィッグに使う髪となるのだそうさ。こ

の費用はダンボール一箱分で三十万円かかる。さらに一つのウィッグを作るには二十～三十人の髪の毛が必要なのだ。その髪の毛の長さは三十一センチ以上だから約三年は伸ばさないといけない。大切にのばした髪を提供することはとても勇気がいることだと思う。妹ははじめて短く切つた髪で家に帰つてきたらとてもはずかしそうだった。でもとても、似合っていた。

この本の中では、いろんな理由でウィッグを希ぼうする子供たちの今までの生き方や、ウィッグが届くまでの様子が書かれている。中にはウィッグがとどくまでに病気が悪くなつて亡くなつてしまった子もいる。でもウィッグをつけてとても喜んだり髪があつたころのふつうの生活がおくれる事をとてもうれいしい報告も書いてあつた。そのえがおを見て、家族も安心して心のやすらぎをとりもどせる。

僕はこれから先、髪を三十一センチのばすことは絶対無いと思うけどヘアドネーションが何なのかを知ることができて、髪の毛を持つている人の存在を知ることができた。人は見た目ですぐ思ったことをすぐ口に出してし

まっつて相手をさきずつけてしまうことが日じょうたくさんある。だから、僕は心の目で見ようと思う。そして妹が人の役に立てたことがすごいと思う。

ヘアドネーションは献血とちがつて、年齢や性別にかんけいなく子供でもできるボランティアだ。ヘアドネーションをつうじて人と人が心で接することができたらいいと思う。

「髪がつなぐ物語」

著 別司 芳子

文研出版

